

株式会社日本水道コンサルタント 上 田 育 世

近年、地域住民の意識を抽出する方法や、得られた意識を計画の策定や評価に組み込む方法が多く研究されている。著者らが势力的にこれらの研究を行っておられる姿勢に対し敬意を表わし、今後大いに発展されんことを期待する次第である。以下の諸点について、著者らの意見をお伺いしたい。

- ① 水質保全政策の評価を行う際に、住民（ここでは学生）意識を導入される意義とその限界。つまり、水質保全政策の評価には、住民意識以外にも種々考える評価方法があると考えられるが、何故、住民意識を導入されようとし、住民意識でどこまで評価しうなのか。
- ② 本研究で著者らが主張されたい内容は、分析プロセス；つまり住民意識は周辺の自然状況や情報の量、質に非常に動かされやすく不確定要因が多いため、繰り返しのプロセスが必要とする点なのか、実際の霞ヶ浦における住民意識およびその変化を表現されたいのか。もし後者であるなら、何故、大学生を実験参加者に選ばれたのか。
- ③ 表－１で示されている水質保全政策シナリオを選ばれた理由は。また、６ケースのシナリオは、互いに独立ではなく、何らかの関連が存在すると考えられる。そのため、これら６ケースを選ばれた背景をお教え願いたい。
一方、霞ヶ浦の水質保全政策を考える場合、汚濁発生源に着目したとき、我々が政策的に制御可能な負荷と不可能な負荷の比率がわかればお教え頂きたい。
- ④ 表－２で示されている評価項目選定の理由をお教え願いたい。さらに、13評価項目間には、互いに関連があると思われるが、これらの関連は。
- ⑤ その他
 - (i) 図－１の②の事前意識調査の具体的内容をお教え頂きたい。
 - (ii) 結果の分析中に示されている矛盾度について詳細にお教え頂きたい。